

麗澤大学退休のときを迎えて

中右 実

我が家の周辺は2月も半ばになると梅の花が色香豊かに咲き誇る。地名が「梅園(うめぞの)」というだけあって、その名にたがわず、60本以上の梅の木が植わった梅園公園がある。この公園は我が家の北側にじかに面しているので、二階の窓から全貌が見渡せる。多彩な色合いがぼんやりと溶け合った春霞のような梅見が楽しめる。仕事の合間に階段を上り下するのも運動と心得、窓外の観梅もいつきの気休めとなる。

また梅園公園を中間地点として東西2キロにわたる梅街道があり、その沿道には多様な雑木に交じって少なからず梅の木が配置されている。いまや、白、淡い紅、濃い紅と、色とりどりに満開で、ときに強い香りを放つ。さすがに別名、春告げ草といわれるだけあって、どの花よりも先に春の到来を教えてくれる。

この散歩道を西に向かって歩いて行くと、別の森林公園に突きあたり、公園内には歩行用のトラックがある。それを一周するとほぼ1キロになる。つまり、家を出てすぐ前の散歩道を西にたどり、森林公園まで来たら、その中を一周する、そしてまた同じ道に戻ってくる。これで3キロほどの道のりになるが、これがわたしのお気に入りのウォーキングコースである。そのときどきの気分と体調で、このコースも伸縮自在である。

*

だいたい、机の前に座っている時間が長すぎるのがいけない。放っておけばトイレに立つ以外いつまでも座りっぱなしになってしまう。妻にとがめられては、急いで立ち上がり、トイレに行き、お茶を飲み、ストレッチを各種取り混ぜて最短時間でこなし、すぐにまた机に向かう。これでは心身のバランスが崩れること必定である。若いころとは違うのだと痛感させられる。

世間では有酸素運動がよいという。ご多分に漏れず、わたしもウォーキングを基本日課と心に決め、何とか曲がりなりにも続けているというわけである。幸いにも、自然豊かな生活環境にも恵まれ、それを有効利用しないわけではない。確かに、これだけのウォーキングでも、するかしないかで大きな違いが出てくる。これで気分爽快になればやってよかったのだし、これで余計に疲れてしまったのなら少し加減すべきだったのである。理屈では分かり切ったことを言うようだが、そのさじ加減は実に微妙なものである。医者に聞いてもわからない、当事者の経験知のみが頼みとなる。

病気もちで体力のない老年は誰よりも賢く生きなければならない。感覚器官が劣化する中で全体感覚を磨き、経験知を身につけなければならない。まさしく二律背反の中を生きるようなものである。やるべきことをやらず、やってはいけないことをやっている、どこかに不調の兆しが現われ、心身のバランスが崩れる。それを取り戻すには、人一倍手間

暇がかかる。基本日課を大事に積み重ねないと体調を維持できない人生の局面に突入していることは間違いない。

これまで空気のように意識しなくて済んだ日常生活を、いまや、断面ごとに意識に乗せつつ一步を踏み出す、といった厄介な生きかたを余儀なくされる。大げさに言うつもりもないが、心身ともに、それほどまでに負荷の大きな生きかたを強いられる。これにあらがっても仕方がない。もとよりこれはあらがうべき対象ではない。そう自分によく言い聞かせておくことから、地に足のついた次の第一歩が始まるのだと納得するほかない。

*

知らぬ間に古希を迎えてしまったというのが実感である。そしてこの人生の節目に麗澤大学で定年を迎えられることを深く感謝したい。正直、「大過なく」と形容するには不本意な7年間だった。ただただ、我が身の不徳の致すところというほか、ことばが見つからない。ひとえに同僚の先生方および事務方の皆さんのご寛容とご厚情に支えられて、なんとかゴールにたどり着けた、というのが正直な気持ちである。心から感謝申し上げます。

日暮れて道遠し。やり残したことはあまりにも多すぎる。いまとなっては取り返ししようもないが、まだ残された人生がある。この旅立ちにあたり思い起こすことが二つある。

ひとつは、藤本幸夫先生に「退休」ということばを教わったこと。誠に有難いことに、わたしのために「退休記念シンポジウム」という晴れの舞台を用意してくださったが、そこに見える「退休」ということばには新鮮な響きがある。この際、もちろん「退官」ではないし、やっぱり「退職」か、という窮状を救うものだった。さすがに、藤本先生の専門筋では、ときにこのことばが用いられるとのこと。ためしに『広辞苑』も『大辞泉』も繰ってみたが、見当たらない。日本の大辞典に未登録という希少価値に加えて、そこはかたなく漂う雰囲気がなんとも心地よい。「いまはひとまず職を退き、いつか心身を休めて、次の仕事に向けて英気を養ってください」と言われているようにしか、わたしには聞こえない。「退休」ひとつのことばでわたしは心が解き放たれ勇気づけられたのである。

そしてもうひとつは、我が恩師・安井稔先生の存在そのものである。先生は両眼を失明されて久しい。そして先年、奥様をお亡くしになった。何もかもがご不自由ななか、卒寿を迎えられてなお、毎年のように英語学の専門書を上梓される。超人的と形容するほかない強靱な精神と生の完全燃焼への透徹した意志とが相俟って稀有な人間存在のありかたを顕現しておられる。2年ほど前、久しぶりに歓談する機会があり、年齢差が20年あるという話に及んだとき、「中右君、20年あれば何でもできるよ」と言われた。とんでもない、わたしは先生の足元にも及ばない、そう自分では納得しているにもかかわらず、この確信に満ちた先生のひと言は、我が行く末にくっきりと道筋をつけてくれる道標のように感じられた。明るい展望が開ける思いだった。

中右 実教授 略歴・主要業績

略 歴

- 1941年1月 神戸に生まれる
1963年3月 大阪外国語大学外国語学部英語学科卒業
1966年3月 東北大学大学院文学研究科修士課程英語学専攻修了
1968年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程英語学専攻単位取得退学
1968年4月 宮城教育大学教育学部講師（1970年8月まで）
1971年8月 マサチューセッツ工科大学（MIT）大学院博士課程言語学科修了
1971年9月 Ph.D.取得（言語学、MIT）
1972年2月 東京学芸大学教育学部講師（1973年7月まで）
1973年7月 東京学芸大学教育学部助教授（1975年3月まで）
1975年4月 筑波大学文芸・言語学系助教授（1985年9月まで）
1985年10月 筑波大学文芸・言語学系教授（2004年3月まで）
1991年6月 カリフォルニア大学バークレー校言語学科客員研究員（1992年4月まで）
1994年4月 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科長（1998年3月まで）
2004年3月 筑波大学定年退官
2004年4月 筑波大学名誉教授
2004年4月 麗澤大学外国語学部・大学院言語教育研究科教授（2011年3月まで）

主要業績

著 書

- (1) Sentential Complementation in Japanese（単著、開拓社、1973）
- (2) Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar（共著、Academic Press, 1975）
- (3) 日英語比較講座第2巻『文法』（共著、大修館書店、1980）
- (4) 『重要構文70』（単著、日本英語教育協会、1980）
- (5) 英語学大系第7巻『意味論』（共著、大修館書店、1983）
- (6) 『認知意味論の原理』（単著、大修館書店、1994）
- (7) 日英語比較選書第5巻『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）

学術論文

- (1) 'The deep structure of English free relative clauses' (Studies in English Literature and Linguistics, 日本英文学会、1973)

- (2) 'English relativization and idioms' (『文藝・言語研究：言語篇』筑波大学文芸・言語学系、1977)
- (3) 「モダリティと命題」(『英語と日本語と』、くろしお出版、1979)
- (4) 「変形と意味の原理」(『英語青年』127巻7号、研究社、1981)
- (5) 「意味論の原理(1-24)」(『英語青年』130巻1号-131巻12号、研究社、1984-1986)
- (6) 「『簡約日本語』を問う」(『日本語学』7巻9月号、明治書院、1988)
- (7) 「普遍意味論からの発想」(『これからの日本語研究』、国立国語研究所、1990)
- (8) 「普遍意味論の方法」(『認知科学ハンドブック』、共立出版、1992)
- (9) 'Modality and subjective semantics' (Tsukuba English Studies, vol.11, 1992)
- (10) 「日英語の空間認識の型(1-3)」(『英語青年』140巻10-12号、研究社、1995)
- (11) 「生成統語論から認知意味論へ」(Kansai Linguistic Society 16, 関西言語学会、1996)
- (12) 「〈道具〉扱いか〈場所〉扱いか—日英語に見る知覚の癖と構文型」(『「こころ」から「ことば」へ「ことば」から「こころ」へ』、梅光女学院大学公開講座論集第40集、笠間書院、1997)
- (13) 'The actional passive is no more' (Studies in English Linguistics, 大修館書店、1997)
- (14) 「法助動詞そして主観的モダリティ化」(『英語語法文法研究』、英語語法文法学会、1997)
- (15) 「言語表現の意味と形式—その対応関係の多様性」(『上智大学言語学会会報』第12号、1997)
- (16) 『柔軟な思考の鋳型としての〈DO+目的語〉構文—その生産性と場面依存性』(『英語青年』144巻9号、研究社、1998)
- (17) 「モダリティをどう捉えるか」(『言語』28巻6号、大修館書店、1999)
- (18) 「ジョージ・レイコフ—身体化された精神」(『大航海』34号、新書館、2000)
- (19) 「なぜat nightというのにat dayとはいわないか」(『高校英語展望』20号、小学館、2001)
- (20) 「英語の『動能』構文」(『市河賞36年の軌跡』、開拓社、2003)
- (21) 「破格構文と文法化」(『英語青年』149巻9号、2003)
- (22) 「言語と認知と文化のインターフェース—なぜin a carなのにon a busなのか」(『英語青年』150巻6号、2004)
- (23) 「敬語と主観性(上・中・下)」(『言語』37巻9・10・11号、大修館書店、2008)